

辰巳だより

中部支部だより

総会並に懇親会開催於松ヶ島
昭和五十八年 七月二十一日
(泊)二十二日

七月二十一日その日は生憎の小
雨模様、併し集合時刻には予定の
人員が揃ったので計画を変更しタ
クシーで会場の松ヶ島へ直行する
会場には既に本部より参加の三名



が到着していたので出席人員の十
名の顔が揃った。一昨年新築した
ばかりのこの松ヶ島は名古屋市當
で老人向きに造られ万事が行届い
ている。それに天然の温泉が湧出
し大浴場の素晴らしさも気に入っ
た我々年配者には以ってこいだ。

部屋に入ると畳の香りがブんと
匂う矢張り畳と何んとかは新らし
いのに限るといった言葉がフト頭
をかすめるこの匂い万更でもない。
そこで少憩後備えつけのユカタに
着替え何はともあれいで湯につか
り疲れをいやす。サッパリした所
で大広間の食堂に陣取る。粗酒粗
餐だが誰も気にしない美食には卒
業した会員ばかりだし気楽にあぐ
らをかいて地酒をくみ交し乍らの
歓談が何よりのご馳走だ特別注文
のハマチの活造りの大皿がチョッ
と目につく、平生馴染の薄い会員

松下 同志の顔も飲む程に打
ちとけて和やかになる。
藤田 総会もそこそこにいつ
の間にもやら懇談会に移
岡本 小倉 中倉 竹下 高木 高木夫人
ふさわしい雰囲気だ。盛りに
く盛り上げる。良き鈴木
時代昔話になると皆
んな目を輝やかせ童顔

に返る。とても平均年齢八十二才
とは思えない。

席をロビーに移し雑談数刻辰巳
会の将来についても色々議論もで
たが要は辰巳会を貫する余りのこ
とお互いに健康で長生きすればそ
れだけ辰巳会も長く存続するわけ
だから先ずはお互いに健康第一に
という事で一応落着、二部室を開
放した大部室で引続き歓談が始ま
る。残りの酒を持ち込んで盃を傾
ける者、尽きない懐旧談に花を咲
かせる者、一隅でかすかにイビキ
をかき始める者、雑居寝も亦楽し
く苦にならぬ和やかさ。

明けて二十二日朝風呂をすませ
て朝食後ロビーに集合手締め。拍
手で一応けじめをつける。すつか
り雨も上った庭園で記念の撮影、
迎いの車が着いたのでお互いに再
会を約し西に東に帰路につく。

この会合矢張り辰巳会員ならで
はの和やかさ心温まる友情をヒシ
ヒシと覚える。それだけで会合の
意義と目的は達せられたと自負し
支部だよりのペンを置く。(竹下記)
因に出席会員左記の通り
高木虎之助、岡本夫人、小原恒太郎、
田中卓次、岡本志良、竹下富士松、
斎藤庸吉、松下重男、藤田健作、
小倉五郎(以上十名略敬称)

竹下富士松、岡本志良様

高木虎之助

前略二十一日の辰巳会中部支部の
総会の際は種々お心遣いを賜わりご
厚志の程有難くお礼を申しあげます。
何分初参加の為や勝手が判らず初
めの間は多少戸惑いもありましたが
とも隔意なく話しあえるようになり
往時が偲ばれる数々の懐かしいお話
あいを伺って居る間にいつしか昔の
鈴木時代に還った様な錯覚さへ起す
程で実に懐かしい限りでした。

この様に初対面の方とも何んの異
和感もなく久々に逢った親類の人
達の様を親しみを感じ打ち解けて話
しいが出来たのも昔一つ釜の飯を
喰べあった仲なればこそと痛感致し
ました。お蔭を以ってこの誠に意義
ある会合に参加旧友と楽しい一夜を
過す事が出来たのも、偏に支部長
幹事両氏の並々ならぬご尽力があつ
たればこそと心よりお礼を申し上げ
ます。名古屋駅にて解散後徳川美術
館を見学致し建中寺より大須観音に
詣り夕刻元気に帰路致しました。
今度は何分初めての参加のこととて
種々迷惑をおかけしたこと、恐縮
して居ります。平にお許し下さい。
では中部支部の益々の発展と支
部長、幹事両氏のご健康を心よりお
祈り申しあげます。
先は右御礼まで (原文のま、)

阪神秋季例会

岡山県美作しいたけ園
湯郷 鷺 温泉 行

秋の声とは草木をわたる風の音
かも知れない。山村におこるふと
した物音とも見える。

今回の例会はすこしく趣向をか
え、小倉幹事らの企画のもとに、
去る五十八年十月十二日(水)こ
の田園秋色を味わうべく、例に依つ
て午前八時五十分、神戸駅前から
出席者二十九名、キクヤバスに塔
乗し出発した。明るいガイド嬢の
名調子を添え、爽かな語りもい
と和かに、第二神明国道から姫路



パイパス、中国縦貫道路に入る。
快調そのものの上なし。

懸念していた十三号台風も通り
抜け絶好の小春日を迎えたことは
何よりの倖であった。目指す美作
しいたけ園に到着したのは丁度正
午、しいたけ園の案内人の説明を
聞き流し乍らしいたけ狩りが始ま
る。各自の手籠を提げて園内に這
入れば、やわらかそうなしいたけ
が椎の木から顔を輝して笑ってい
る。そこで各自が物も言わず収穫
を争ったことが想出となった。し
いたけ狩りの終ったところで昼食
の宴に就くと早バーベキュウの煮
えている芳りが一同の食欲をそそ
った。命は食にあると誰か喋っ
ていた。今日御全快され御出席の
大幡幹事長の開会の辞の御元気に
一同心強く想えた。次いで乾盃に
移ったが、この日柳田幹事八十六
回目の誕生日とあって同氏から中
国製ワインと福島蔵の長命酒の寄
贈があり錦上添花を添えた。平生口
にしないしいたけの美味にバー
ベキュウのコマギレ肉で宴の盛り
あがりを見せた。其の間鈴木時代
の懐旧も一入であった。この日時
間の都合上入浴の予定のつかなか
ったいで湯郷温泉、幸にも都合が

つき早速その動議を計ったところ
一も二も異議なく賛成、銘々タオ
ルを買って湯舟に身を憩わせたこ
とが今回のヒットとなったことが
嬉しい。湯郷温泉の沿革を申上
げると……

中国山脈の山ふところに湯けむ
りをたゞよわせる温泉で今から約
一、二〇〇年前(日本仏教伝来の
歳)慈覚大師円仁が傷ついた白鷺
にみちびかれて発見されたと言う。
泉質はラジウム気泡含塩化土温
泉で美人造りの名湯と聞かされて
婦人達は一層気をよくされたこと
と思う。風呂で思い出せることは
昔洛美寮でお互いに肩の流し合い
をやって寮生活を楽しんだこと、
辰巳会のわれわれは全く裸の交際
の元祖とも言える。而して今日尚
兄弟以上の交りはここから始つて
いる尊さをしみじみと感じた。

時速に責められるま、午後三時
半これまでの道路を逆撫で、夕焼
空を背にして走る。

バス内ではガイドさんのメロデ
ーに続いて佐野君、岩永君らの得
意の咽喉の御披露がありガイドさ
んまでがうっとりとなった。

神戸駅近くともなれば、早都心
はほの暗くなりネオンの輝きが瞳

にさしこんで来た。

解散は予定通り六時、名残りを
惜しんで再会を約して家路へと辿
った。

湯の郷の湯煙り走る吉井川

会務報告

小倉 五郎

案じておりました十三号台風も
何処へやら退散の上もない行楽
日和に恵まれました。御覧のよう
に本日の出席者は今迄に無く僅か
二十九名と言う結果となりました。

この度の計画が不味かったとも
思えませんが片道三時間強と言う
バスの強行が禍したのか、又行楽
シーズンの日程が重ったのか、或
は人事ならずとも田中判決に心動
かされたのかとも推察する次第で
す。今回の計画に対して唯しい草
狩だけで一日をつぶすことは物足
らぬのではないかと一部の御意
見もあつたように見受けられまし
たが、今後の計画には念には念を
入れ出来るだけ多数の御参加を
仰ぐ運びに努力致します。弁
解がましくなりますが、この季に
九時集合、五時半解散、途中四回
の休憩時間を見ますと二時間で、
しい草狩りと会食を済ませればな
らないので、多数無理が手伝った

ことも反省する次第です。今回の行程状報は例会記とも重なりますので省略しました。

辰巳会幹事会

於六甲山荘 五八年八月九日

(前列)

(後列)

高畑 安並
小倉 柳田
藤田 大幡
松下 斉藤
松 下 藤 下 齊藤



辰巳会秋季例会名簿

昭和五十八年十月十二日(水)

於美作しいたけ園

岩永英三	武井一郎	小倉五郎	福澤有作	小野晶子	藤田健一	小川多喜子	松田大介	奥村孝三	松重男	奥田さき	南正義	木下清三郎	安並重夫	佐野寿夫	山崎敏明	篠崎幸輔	柳田義一	下雅意	亀吉	柳田政江	曾根好雄	柳田政江	高畑薫幸
------	------	------	------	------	------	-------	------	------	-----	------	-----	-------	------	------	------	------	------	-----	----	------	------	------	------

東京支部秋季例会

鳥山の築場のこと

小島 実

辰巳会の旅行は石田幹事さんの至れり、尽せりの事前調査と、その実状を車内で報告され楽しく会員の親睦と、憶い出を話す年中行事となつてゐる。

今回も目玉の一つが栃木県の、「鳥山やな」の鮎料理と築見物に



あった。鮎は年魚、国産魚、香魚と言われ北海道を北限として全国の大小の河川の殆ど全部に昔から穫れ、魚漁の一つとして築漁が盛んだった。庶民の蛋白資源であった。その川魚の内での王様で鮎の香気、味についてはお国自慢の最たるもので自分の郷里のものが日本一で他国の鮎は問題にならぬとやっきになって主張するのが少年時代から風習であった事大方の皆様の身に覚えのあることだろう。釣り。投網、釜などの他鵜飼と築漁とは特に有名で鳥山築も案内書には一二〇〇年前から伝統を保ち(夜奈須)と言いました。鵜に

魚田。フライに蒲焼迄添えて、盛り沢山のご馳走が用意されていた。サントリーのビールも添えてありまず一杯と喉を潤し、ゆつくりと頂戴した。ただ予定時間を大分遅れたのと多数会員のため、少々焼きざましとなったため美味しなながらも少々惜しい思がした。一日は然し大満足で、食後築場に降り糞

東京支部秋の例会

(鳥山・大谷) 五・三〇・二六

田代	菊地	上野	芦原	高橋	立花	山岡	宮本	松井	嶋内	嶋内	塩津	安東	石田	斉藤
同義	同輝	同金	有治	八郎	同実	同義	守美	竹枝	桃枝	同均	同均	同均	同均	同均
伴雄	伴男	伴治	池加	宇藤	移海	坂野	本野	同真	同真	同真	同真	同真	同真	同真
志鳥	居川	同政	同文	福芳	同哲	同哲	同哲	同哲	同哲	同哲	同哲	同哲	同哲	同哲
芳同	同健	同健	同健	同健	同健	同健	同健	同健	同健	同健	同健	同健	同健	同健
子伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴	健伴

大谷観音を訪ねて

煙石隼人

道路の渋滞で、予定時間が一時間以上もおくれ、我々一行が、大谷寺に着いたのは、午後四時少し前であった。

天開山大谷寺は、坂東十九番の札所である。古くから大谷観音として知られた名刹である。

バスから下りて、大谷石のトンネルをくぐり、平和観音の前に出た。自然石に彫刻された、堂々たる八丈八尺(約二十七米)の巨像

である。

これは、昭和二十年、大谷の大工職、上野波直氏が発願し、第二次世界大戦の戦没者の霊を弔い、世界の平和を祈願し、地元住民の熱心な後援のもとに、自然石の壁面に、一刻三拝の礼をつくして、刻みつけたものだ。その後東京芸大教授の武田朝次郎に引継がれ巨万の経費と六年の歳月をかけて昭和二十九年十二月完成されたものである。平和観音といわれる所以である。

観音のお顔は、大谷石の生地のままの白地であるが、頭や肩からの衣紋の流れは、多年の風雪によって、黒ずんでいる。それが却って年代の重みを、そえているように思えた。

周囲が絶壁の中のこの平和観音には、奥床しさと、豊かで、安らかな表情とともに、おかされることのない、広大無辺な生命力のようなものが感じられてならなかった。右手の花壇には「秋思菊」が黄色く咲いていた。

再び大谷石のトンネルをくぐって「普門閣」という額のある山門に入った。

「重要文化財、特別史跡大谷の

よる「動」的漁法であり、築は簀と水流を利用する「静」的漁法と対照的の二大方法である。この日途中一寸車の渋滞はあったが久しぶりの好晴に恵まれ、天高く気澄む秋空は全く有難い行楽日和と終始した。

車は一路現場へ県内第一の長流鬼怒川の系統で支流荒川を併せて南へ流れる「那珂川」で都市としての起源は応永年間(一三九四〜一四二八年)地方豪族の那須資康が、この丘陵上に「鳥山城」を築いたのが始まりで、豊臣、徳川時代と移り替りはあったが大凡三万石程度の大名の支配下として現在人口二万余の地方都市であり、稲作を主作物として畑作葉タバコや干瓢造りでも有名、他はブドウ園くり園、みかん園と果樹に力を入れて居る。また和紙の生産地として特に厚手和紙の程村紙は町の指定文化財と言う。

築は関東の嵐山と言われる県立那珂川自然公園の「落石やな」：下り築……で毎年六月から十一月まで開いて居る環境は紅葉には少し早い清冽の水量豊富な築を目前にした、会場ひのきやでテーブルには既に料理の品々、鮎の塩焼。

石仏」についての概略を記した揭示が正面にあった。受付を通り抜けると、小山の下に、そのいただきが、おおいかがぶさるような、岩壁に接して、木造の本堂があり、その右手の壁にそって脇堂がある。堂内に入ると、弘法大師作と伝えられる、大谷石に浮き彫りされた、御丈一丈(約三米余)あまりの腰は細く、足は長く、すんなりとした千手観音の立像がある。平安初期に見られる仏像の特色をそなえている。像容は損じてはいるが千手観音のもつ崇高さは少しも失なわれていないようであった。これが所謂大谷観音である。

本堂につづく脇堂には、前面に傾斜した壁面に、大きな彩迦三尊が彫られ、その次には、薬師三尊更に阿弥陀三尊とつづいていた。これらの洞穴にある、高浮き彫りされた、磨崖仏群は、いづれも、日本最古のものであり、秀れた技巧によって制作されたものとして高く評価されている。

その保存維持のための修理中、昭和四十年に、堂下から、年令十八〜二十才ぐらいの、若い人の骨をはじめとする、七千年前後の人類三丁四体、それに縄文初期から

四国支部だより

十一月二十二日二十三日
 於高知市丸の内会館
 昨年は七月九日十日に高知から
 東へ二十キロ程離れた海浜の海風
 荘で会を開き、本部から小倉五郎
 さんと藤田健作さんを迎え、地元
 七名出席楽しいつどいを致しまし
 た。今年は年末近づき出席者が無
 いかも判らんと思ひ心配致しまし
 たが、地元から七名、本部から柳
 田さんと小倉さんが御出席下され
 誠に有難うございました。午前十



時頃大阪から高知空港着のお二人
 を迎えて車で高知市へ向い、中食
 後四国三十三番札所高知市長浜の
 雪隠寺に至る。この寺には運慶、
 湛慶の刻んだ重要文化財としての
 仏像が十六体もある。長宗我部元
 親の菩提寺でもある。それから午
 後二時宿舎へ到着、一同車をつら
 ねて市内筆山の墓地にある金子直
 吉翁のお墓詣りをして往時をなつ
 かくし思いおこすことが出来た。
 この墓地は市街を眼下に見下ろし
 眺めのよい所である。
 それから宿舎に帰り夕方五時半
 頃から懇談会を開き昔話に花が咲
 き夜の更けるのも忘れてしまった。
 翌日はそのまま出発まで旅館で懇
 談するつもりであったけれど元氣
 を出して出かけることとなり、県
 立郷土文化会館でたまたま開催中
 の明治時代の日本画の展覧会を見
 て車で出発、小松、久保、竹崎の
 三人の案内で先づ土佐神社へ参拝
 の後、二十九番札所国分寺に到着
 この寺には古い仏像などもある。
 それから飛行機出発の午後四時ま
 では時間があるので空港近くの食
 堂初瀬で二時間位を楽しくすごす
 ことが出来た。空港でお見送りし
 て解散致しましたが皆さんのわか

げで無事に今年の会を開催するこ
 とが出来ました。小松さんは昨年
 は痛風と言う難病で難儀していた
 のに全快して昔の元氣をとりもど
 し大敷組合の組合長として多忙の
 中を出席して大変お世話になりま
 した。今年病氣その他の都合で御
 欠席の支部の皆さんも、来年は御
 出席を願います。六月頃の予定で
 す。毎年五月の本部の会に支部の
 人もなるだけ出席するようおすす
 めします。今回の出席者は左の通
 りです。(敬称略)
 本部 柳田 義一、小倉 五郎
 支部 久保 辰生、小松 豊彦
 中屋傳太郎、松木三四郎
 武内 雪恵、傍士 雪子
 竹崎 浅吉
 (竹崎浅吉記)

原稿募集
 内容 随想 短歌 俳句 絵画
 詩 写真 鈴木往時の思
 出などを
 必ず原稿用紙に縦書で
 四百字詰五枚程度
 締切 昭和五十九年五月末日
 送先 神戸市中央区京町七二
 太陽鋳工(株)内
 「たつみ」編集部宛

(五八、一〇、二八)

弥生時代にいたるまでの、土器、
 石器、獣骨など、およそ、一万点
 にのぼる考古資料が発掘され、学
 界からも注目を浴び、現在では鉄
 筋の収蔵庫に展示されている。
 拝観を終るに先立ち案内人(カ
 ンノン食堂の主人)は、女の人は
 誰でも、観音様のように、美しく
 なれますよ、という。観音様のよ
 うに美しくなりたい人は、心に邪
 心を持たないことです。よこしま
 な心、疑い深い心、ひがみとか、
 ねたみとか、道にはずれた、不純
 な心、そういったものがなければ
 観音様のように、美しい、柔和な
 顔になれます。そして、もう一つ
 感謝の心を、忘れないようにして
 下さい、と結んだ。
 門前には大谷石の灯籠や、その
 他の土産物を売る店があった。カ
 ンノン食堂に立寄り、お茶をいた
 だき、ささやかな土産物を買った。
 案内のお札をのべつつ、バスに乗
 った。丁度午後五時であった。
 晩秋の空には、夕焼雲が、かが
 やいていた。楽しい一日の旅行で
 あった。

思わぬマグロ・フィーバー

443匹ノ何と2日で年間水揚げ分記録

高知・窪川

【高知】原発騒動で知られる高
 知県高岡郡窪川町の原発建設候補
 地に当たる土佐湾沿岸で、地元の
 興津大敷漁業生産組合(小松豊秀
 組合長)が定置網を仕掛けたとこ
 ろ十、十一の両日でキハダマグロ
 が四百四十三匹も捕れた。体長一
 ・五尺、重さ八十斤前後。一き当

永井幸太郎物語に就いて

前号で御紹介申上げた永井幸太
 郎物語りが日商岩井(株)植田三
 男氏御尽力の許に今回発刊された
 ことは慶賀に堪えない。之はNH
 K大塚融記者の綿密なる調査に基
 くもの、一読翁の御生涯の全貌が
 浮き出されている。思いまするに
 この小冊子は誠に貴重なもの永井
 家御一門の御満足もさぞかしと俣
 ばれてならない。(編)



たり千三百一二十七百円で取引さ
 れ、同組合の年間水揚げ高に相当
 する約五千万円をわずか二日間で
 記録した。
 定置網を入れていたのは、興津
 浦分漁港の沖約一きで、四国電力
 が原発立地可能性調査を予定して
 いる海域内。例年、晩秋からブリ
 漁が行われるところで、同組合が
 今月初め、ハマチ、アジなど小物
 を狙って定置網を敷き込んだ。と
 ころが十日に六十九匹、十一日は
 三百七十四匹のキハダマグロが入
 っていた。

思わぬマグロに三十人の組合員
 だけでは手に負えず、浜総出で水
 揚げ。近隣漁協の保冷車の応援で
 東京、大阪などの市場へ送った。

同組合関係者は「数年前に二百
 匹ほど上がったことがあるが、今
 回のような大漁は初めて。回遊魚
 のマグロが定置に入るのはまれで
 台風13号の置き土産だろうか」と
 思わぬボーナスに興奮していた。
 (神戸新聞五八・一〇・一三)

物 故 会 員

御 芳 名	死 亡 年 月	享 年	最終勤務先
大 柳 勇三郎	57年11月4日	85才	帝国汽船
成 瀬 佐太郎	58年6月9日	86才	名古屋支店
広 戸 忠 吉	58年6月26日	84才	防機製造
隅 田 秀 真	58年7月10日	79才	文書課
川 口 一 郎	58年7月17日	80才	香港支店
家 後 修二郎	58年8月7日	75才	東邦金属
尾 形 幸 助	58年8月12日	81才	本店秘書課
長 嶋 隆	58年9月6日	83才	大連出張所
大 久 保 秀 樹	58年9月7日	91才	
北 保 保	58年9月19日	81才	東京支店
小 島 三 雄	58年10月26日	91才	
高 橋 彦 一	58年12月4日	85才	浪華倉庫
宇 津 木 亥 一	58年12月7日	85才	本店外電部
松 岡 俊 一	58年12月18日	85才	ジャバ斯拉バヤ支店 元太陽鋳工専務